

## アメリカという「純粋な悪」または地球的災厄

私のよく翻訳紹介する P・C・ロバーツは、「ロシア(と中国)はどこまで我慢できるか？」  
<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160804.pdf> という論文で、「純粋な悪」  
(unadulterated evil, 混じり物のない悪)という言葉、アメリカと西側諸国に対して使っている。「純粋な悪」などと言うものはないだろう、どんな国でも、どんな人でも悪いところと良いところをもっているはずだ、と大抵の人が言うだろう。私の見方はそうではない。私は歴史が偶然によって動かされているという考えをとらない。それは宇宙の大きな力によって動かされている。そして今が摂理的な大転換期(終末)だと考える。人はこれを根拠がないとか、迷信だとか言うかもしれない。しかし、ものを考えるには「仮説」というものがあり、私は、自分が何年も前に直観によって立てた仮説が、時間とともに、限りなく「事実」に近づいていると考えている。P・C・ロバーツのような明敏な人が「純粋な悪」として感ずるのも、そのようないわば“可触的”な悪に違いない。

私の仮説の根底にあるのは、マタイによる福音書 13 章にある、「よい麦と悪い麦の喩え」と言われるものである。これが予言であるか偶然であるかはどうでもよい。ただ、現在の世界が、あまりにも見事に、この比喩で言われている通りに動いているように思える。農場の下働きがあるとき、あわてて主人のところへやってきて言った、「さっき敵(adversary)がやってきて毒麦の種を私たちの麦畑にまいていきました、どうしましょうか？」主人は言った、「それはほっておけ。最初は見分けがつかないが、やがて実りの時が来れば、毒麦とよい麦は歴然と区別がつくようになる。刈り入れたものの、一方は倉に入れ、他方は燃やせばよい。」

これが今、我々の目の前で起こっている。ほんの 4～50 年前まで、よい麦と毒麦は見たところ同じ青草であって、区別がつかなかった。毒麦は巧みにその正体を隠し、善人のように振舞いながら、よい麦を圧倒して世界を支配しようとしていたことに、我々は気づかなかった。彼らは古い歴史をもつ“秘密結社”であるが、その秘密は、目的を達成する過程でのもので、いよいよその時期になれば、否応なく表に現れざるをえなくなる。世界がおそらく初めて、公的にその企みの存在を知らされたのは、1991 年に、ブッシュ・シニアが初めて、米議会で New World Order という言葉を口にしたときだった。つづいて数人の政治家がこの言葉を繰り返したが、やがてぱたりと口にしなくなった。なぜ？これが恐ろしい人間奴隷化計画だと気づかれたからだろう。その後、彼らは計画を一気に実現させようと、“新しいパール・ハーバー”としての 9・11 テロを計画した。この何一つ正当化の余地のない「純粋な悪」が起点となって、次々にホロコーストと破壊が世界で行わ

れ、現在、第三次大戦の可能性が現実化していることは周知の通りである。これは毒麦とよい麦との最終的な対決である。弁別することは誰にでもできるが、刈り入れるのは我々の仕事である。誰かがやってくれるわけではない。武器が役立つわけでもない。毒麦を売りにつけて一儲けするのも、一つの選択である。

彼らは主としてメディアを使ってウソを蔓延させ、肝心のことを隠ぺいしようとする。それに柔順なのがメディアである。メディアは彼らの不可欠の一部である。「純粋な悪」の純粋たるゆえんは、彼らが良心を持たないこと、「卑劣」という感覚を持たないことである。平然たる残虐の他に、「巧みに騙す」ことが彼らの重要な属性である。しかしそれも時間とともに、思い通りにいかなくなった。人々は間違いなく真実に気づき始めた。メディアは相変わらず、プーチンとアサドが悪いなどと言っている。明敏な民衆が一気に真実に目覚めた始めたとき、「よい麦が倉に納められ、毒麦が刈り取られ焼かれる」ときである。

しかし、歴史の大転換期に、混乱や悲劇が伴わないと期待することはできないと思う。ジョン・レノンは、「我々の世界は狂人たちに支配されている」と言ったが、それがいよいよ現実味を帯びてきた。ヒラリーの狂気を含め、それを実感しない人はいないだろう。核戦争を本気で考え、大量の FEMA の棺桶とか収容所といわれるものを、早い時期から用意するような者たちが、すんなり支配権を譲るなどということはない。

では「よい麦」を表象する実体はどこにあるか？ それは明らかに、プーチンと彼のロシアである。ハルマゲドンの善悪の対決は、ロシアと、その国境沿いに配置された米 - NATO 軍の対峙——それ自体、狂気の沙汰である——に形象化されている。プーチンという政治家に対する尊敬と信頼は、ワシントンによる彼の“悪魔化”とは文字通り裏腹に、世界的に絶大であることは間違いない。「プーチンが礼儀正しく、西側の愚かさへの驚きを表明」という記事で紹介された、プーチンの言葉に対するコメント欄が、「ゴッド・ブレス・プーチン!」という声に満ちていることにも、それは現れている。私自身の翻訳にもそのような反応があった。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160915.pdf> 一昨年 7 月 17 日のマレーシア航空機撃墜事件のあと、世界中から膨大な量の署名が集められ、「プーチン大統領ならびにロシア人民の皆さま」へ公開謝罪状が送られたことも忘れてはならない。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/140927.pdf>